

りょうしと キジムナー

まーさん



むかしむかし、おきなあのあたりに
タカヤというりょうしがいいました。



タカヤはまいにちりょうにでかけていましたが、
まいにちさかながとれませんでした。

そんなあるひ、りょうからかえってくると
ひとりのしょうねんがこちらをみていました。

「はいはい、なにかくもんもってないか？」



きょうのしょうかくはさかな2ひきだけでしたが、
タカヤはしょうねんにさかなをぜんぶあげました。

しょうねんはさかなをうけとると
めだまをほじくりかえし、4つたべてしまいました。

「おまえまさかキジムナーか？」

「やんどー（そうだよ）」

キジムナーはめだまのなくなったさかなを
タカヤにかえすところでした。



「もっとめだまがたべたいぞ。
あした、おん（おれ）もつれていけ」

そして、タカヤはキジムナーとふたりで
りょうへでかけることになりました。

つぎのひ、タカヤはいつもとおなじように
りょうをはじめました。

すると、おひさまが「まだかおを
だしたばかりなのに、
あっというまにさかなが
いっぱいとれました。



「おまえすごいな」

「に、に、に、ここにあるさかなのめだま
ぜんぶたべていいか？」

「あら、すきなだけたべろ」

よろこんでキジムナーはさかなのめだまだけを
ぺろりとたいらげてしまいました。

キジムナーとわかれ、むらにもどったタカヤは
めだまのなくなったさかなをうりはじめました。

さかなはつき"からつきへとうれて、
おひさまがしず"むまえには
ぜんぶ"なくなってしまうました。



そして、タカヤとキジムナーはつき"のひも
またつき"のひもいっしょにりょうへでかけました。

めだまのないさかなはまいにちまいにち
うりきれて、タカヤはむらで
いちばんゆうめいなりょうしさんになりました。

あるひ、さかなをうっていると、うわさをききつけた
むらいちばんのらんぼうものがやってきました。

「おまえがうっているさかなは
どうしてぜんぶめだまがないんだ？」

「そっ、それは…」



「キジムナーといっしょにりょうへいっているんだろ？
あした、キジムナーにあわせろ。いいな!？」

そういうとむらいちばんのらんぼうものは
のこっていたさかなを
ぜんぶうばってかえっていきました。

タカヤはそんちょうのところへいき、そうざんしました。

はなしをきいたそんちょうはこういいました。

「あのらんぼうものとキジムナーをあわせてはいけない。
キジムナーをおこらせてしまうとこのむらにも
さいなんがおとずれるかもしれない」

「では、どうすればいいのでしょうか？」

「キジムナーはきっとこのむらでいちばんふるい
がじゅまるのきにすんでいるはずだ。
あのがじゅまるのきにこのまじないを
かけたくいをうってくるんだ」

「そうしたら、キジムナーはどうなってしまうんですか？」

「もらにどとにんげんのせかいに
あらわれることはないだろう」

「...そうですか...」

そんちょうからくいを受けると、
タカヤはいえにもどりました。



タカヤはしばらく一人でかんがえました。



おひさまが"かおをだ"しはじめたころ、
タカヤはむらで"いちば"んふるい
が"じゅまるのきのまえ"にたっていました。

キジムナーとりょうへいくじかんまで
あとすこしです。

タカヤはまじないのかかったくいを
がじゅまるのきにうちつけました。

「キジムナーにたよらなくても
いちにんまえのりょうしになる!!」



おひさまが"か"おをだしても
キジムナーはりょうにやっではきませんでした。



さきにふねでまっていたむらいちばんのらんぼ"うものは
おこって、タカヤにらんぼ"うするとかえっていきました。

くいをうちつけたひから、タカヤのまえに
キジムナーはあらわれなくなりました。

タカヤはひとりでりょうにでかけ、まいにちまいにち
いっしょうけんめいはたらきました。

たいりょうのひもあれば、
いっぴきもつれないひもありました。

それでも、こころにきめたことをまもり
なんねんもなんねんもはたらいていると、
タカヤはむらでいちばん
りっぱなりょうしさんになりました。

おしまい



